

中村路子

58年度現代俳句協会賞受賞作品

菊人形みつめし処より傷む

（54年）

身の裡にしらほねはあり冬櫂

（55年）

眼帯に白き昏らがり露の臺

〃

短夜の喪服ひそかに揃へ置き

〃

ひれ伏して神官に夏終りたり

〃





箸紙にひびきて鮎を落す水

鳴の群翔ち濁点としてわれら

オペラ観るわが莖石の沈みごろ

一ページ毎に黄昏新日記

いち日の声使ひきり白椿

雨音の春となりゆく木綿針

轉りのききとれるまでガラス拭く

遊ぶ目を僧に見られし花御堂

〃

〃

〃

〃 (56年)

〃

〃

〃

〃



翅あらば今たたみ頃夕端居

//

髪洗ふひとの嗚咽のまつはるを

//

身を離れゆき香水のひとりあそび

//

自由時間滝見に少し足らざりき

//

観音の千手に紛れ枯れよぶ手

//

月白の翳の鷗となりゆけり

//

桐咲くやうみどりは屍の翅ひらき

//

友葬る花八つ手より淡く群れ

//



風邪兆すどの鏡にも侮られ

花芯濃く終りし不安桃にあり

落花掃き寄す詰まらなく立つ電柱

蓮池の夕日を泳ぐ鼠の目

白南風の墓が古里素足になる

素足にて渚のけふをたしかむる

もどかしき老滴りに間合あり

夏椿化粧ひて別の声いづる

”

(57年)

”

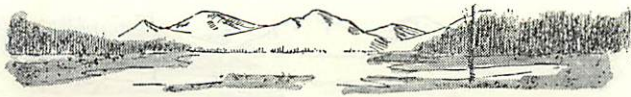
”

”

”

”

”



枝豆のすこし硬くて微笑せり

白萩を刈るや刻々独りになる

口紅のいろを次第に昏らく鴟

紫蘇の実を噛みて自分でなくなりぬ

木の上の少女に喚ばれるる朧

白足袋を脱ぎて岬の旅を消す

毛糸玉突き放しては今を編む

雛壇をきしませ通る碁敵よ

〃

〃

〃

〃

(58年)

〃

〃

〃



風呂敷の自由なかたち青き踏む

埠頭庫の四角い無韻さくら汐

海女の墓卯浪の白をあつめたり

空に触れ山藤ものの終りの白

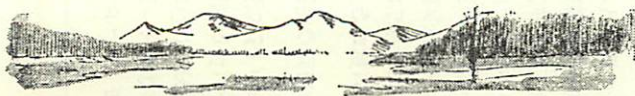
葉桜の旅を充して浪がしら

大学の緑を濃くす培養墓

梅雨の傘裡まで濡れて看とりの日

紙倉に紙の截り口遠き雷

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃



不意に立ち音楽喫茶の蚊を叩く

//

憂き卓の首八方にさくらんぼ

//

炎天の枢われには厳しき師

//

炎昼の鬼火を宥めいたりけり

//

向日葵を野太く咲かせ後継者

//

劇十半の如果さじ

龜山 貞年